

# 琉球大学学術リポジトリ

## 絵と作文がかけない小学校3年男児の時間制限カウンセリング

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-04-15 キーワード (Ja): 絵と作文がかけない, シングル・セッション・カウンセリング, 担任との連携 キーワード (En): 作成者: 平田, 幹夫, Hirata, Mikio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/5649">http://hdl.handle.net/20.500.12000/5649</a>

## 絵と作文がかけない小学校3年男児の 時間制限カウンセリング

平 田 幹 夫\*

Time-Limited Counseling of Third-grade boy  
who cannot draw Picture and cannot write Composition

HIRATA Mikio

### 要 約

本研究は、幼稚園から絵と作文を一度もかいたことがない小3男児に対して、Coと担任が連携しシングルセッションでカウンセリングを行った事例の経過報告と考察を目的としている。担任とシングル・セッション・カウンセリングの介入シナリオの検討を行い、以下のようなカウンセリングを行った。①給食の様子を写真撮影にきた大学の先生という場面を設定を行った。②笑顔で語りかけ、笑いを共有した。③他の子どもより優れているところをみんなの前で誉めた。④学級の仲間をカウンセリングの援助者に位置づけた。⑤描画場面においては、描画に対する自己効力感を高めるために「他の人よりも感じる力があり、それを表現するすごい能力を持っている」と何度も伝えることを行った。その結果、絵を描けるようになり、短文ではあるが作文も書けるようになった。また、小3男児の描画について考察を行った。

キー・ワード：絵と作文がかけない、シングル・セッション・カウンセリング、担任との連携

### 【はじめに】

描画は、子どもたちにとって小さい頃から慣れ親しみ、遊びの一つをなしているものである。そのため、文字や言語による表現は十分できない子どもでも、絵で表現することはできる。小学生に人物を描かせると程度の差はあれ、殆どすべての子どもたちが描くことができる。

人物描画における質的仮説は描き手が絵の中

の人物に自分自身を投影させていると仮定している。Machover (1953) は、人物描画はそれを描いた人間に特徴的な衝動、不安、葛藤、代償作用等と深く関係していると述べている。描画は、対象あるいは描き手の精神状態の何らかの移し換えや表現であると考えられる。それゆえ、絵は、現実を何らかの仕方で指し示しており、現実と様々な関係を結んでいるといえるで

\*琉球大学教育学部

あろう。また、描画は非言語的な意識化の意味表出であり、表現行為それ自体が有するカタルシス効果の持つ意味も大きい(岩井, 1999)。故に、描画が描画心理学あるいは描画療法として数多くの研究がなされている。

一方で、身体的に何ら問題がない子どもたちの中で、絵を描くことができない子どもたちがいる。例えば、筆者がこれまで扱ってきたケースの中で、虐待を受けた子どもや場面緘黙の子ども、不登校から引きこもり状態になっている子どもの中に描画(特に自画像)ができない子どもがいた。そのような子どもたちの描画に関する研究はあまりなされていない。筆者は、心因性の何らかの理由により絵が描けない子どもたちに対して、これまで短期間で絵を描かせるカウンセリングを行ってきた。

その実践的知見から、絵が描けない子どもたちに対して、「君自身は、感じていないかもしれないけど、君は感じる力が他の人よりも強い。それを表現することができるすごい才能を持っている」ということを頻繁に語りかけることが必要であることがわかってきた。そのような語りかけは、「もしかしたら本当に自分はすごい能力を持っているかもしれない。だから、本当に絵を描くことができるかもしれない」という描画に対する子どもの自己効力感を高めさせることができ、描画への動機づけを高めることができると考えられる。つまり、Litt (1988) や Schunk (1989) が述べているように、ある行動を習得する能力があるとされていてその行動を勧められた人は、問題が生じたときに、自分の欠陥についてくよくよ考えたり、自分に疑念を抱いたりしないで、その行動により多くの努力を投入し続けるだろう。

本研究では、幼稚園から小学校3年まで1度も絵と作文をかいたことがない小学校3年男児が、カウンセラーと担任、クラスの子ども、校長等の連携協力のもとにシングル・セッション・カウンセリングで、絵と作文がかけられるようになったカウンセリングの経過を報告し考察することを目的とする。

## 【事例の概要】

(1) クライアント：小3男児(以後G男とする)

(2) 主 訴

幼稚園から小学校3年まで1度も学校でも家庭でも絵を描いたことがなく、作文を書いたこともない。

(3) 家族構成

父親(40代)は建築デザイン関係の自営業を一人で営んでいたが脳腫瘍の手術後、仕事が出来なくなり無職。母親(40代)がパートをしながら家計を支えている。G男の下に妹(幼稚園児)がいて4人家族である。

(4) 面接までの経過

学級での様子と家庭での様子は、担任から相談があったときの内容をまとめたものである。本研究では、プライバシーの保護のために、問題の本質を変えない程度で若干の内容の変更を行っている。

学級での様子

G男は、算数の計算がクラスの中で一番速く、「G男はすごい」と友達から賞賛されることが多々ある。休み時間になると、男子がG男を遊びに誘ったりすることが殆どで、G男の方から積極的に友達を遊びに誘うことはあまりない。言葉数はどちらかというとな少ない方であるが、友達や教師とのコミュニケーションは普通に取れている。クラスの友達と時々大きな声を出しながら楽しそうに遊ぶこともある。友達が声をかけをしないときは、読書をしていることが多い。読書は大好きで学年で多読賞をもらったこともある。

成績は上位の方であるが、授業中は自分から挙手をする事がほとんどない。指名された時には、他の子どもに比べて若干小さな声ではあるが答えることはできる。図工の時間等に絵を一度も描いたことがない。国語の時間や道徳の時間、学級会活動等に課された作文は、一度も書いたことがない。音楽の時間に大きな声を出して歌うことはなく、囁くぐらいの小さな声で歌っている。担任がG男に聞いたところによると、幼稚園の頃から絵と作文を一度もかいたことがないということである。1学期の始めの頃

は、巻めたり、叱ったり、放課後等に居残りをさせたりとあらゆる手を使って絵と作文をかかせようと取り組んだがうまくいかなかった。

#### 家庭での様子

G男が3歳の頃に父親が脳腫瘍の手術を行う。父親の入院と同時にG男は母親の祖父母に預けられる。父親は術後の後遺症で記憶障害になり、家の中では常にイライラして家族に対して怒鳴ることがよくあった。母親は、G男が大きな声を出したり、テレビの音が少しでも大きいと、父親の機嫌が悪くなるので、家の中で静かにするようにG男に言い聞かせていた。

#### 【介入の方針及び手続き】

G男が絵を描けるようにするための介入シナリオ (Fig 1) を作成し、担任と十分な打ち合わせを行った。

- ① 介入に当たっては、担任との連携を中心に位置づける。
- ② 担任はG男の現状を保護者に十分に説明しカウンセリングの理解を得る。
- ③ Coと役割分担をし連携・協力して当たる。担任は褒める役に徹する。
- ④ Coと信頼関係をつくるためのきっかけとなる場面の設定 (大学の先生が給食時間の写真撮影に来た) を行う。
- ⑤ CoがG男と数名の子どもたちを清掃時間から45分の休憩時間の70分の時間で絵を描かせる場面設定を行う。
- ⑥ 5校時の授業まで介入を要する場合は、Coが子どもたちに担任の了解をもらうように指示する。
- ⑦ G男が絵を描くことができた場合は、担任は最大限の喜びを表現し、学級の子どもたちも喜びを共有できるような場面設定を行う。
- ⑧ G男を校長室に連れて行き、G男が描いた絵を見せる。校長がその絵について賞賛の言葉を述べる。
- ⑨ 担任は保護者に介入の様子を詳しく説明し、G男を褒めるように伝える。
- ⑩ 必要に応じて、母親面談を行う。

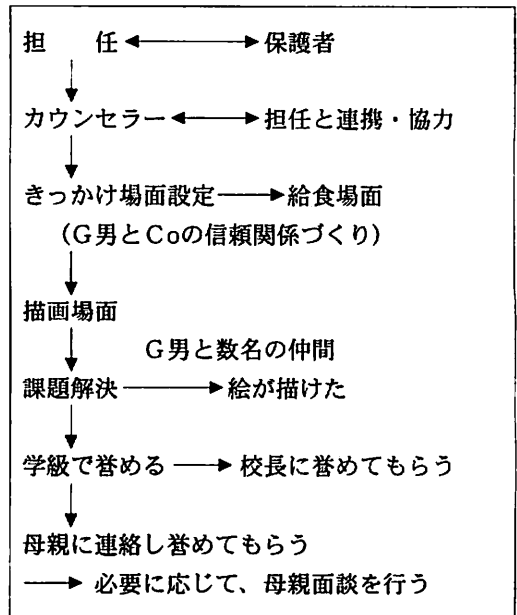


Fig 1 G男への介入シナリオ

#### 【面接経過】

< >はG男の発言、「」はCoの発言、『』はその他の発言

#### (1) きっかけづくりの給食場面

Coは給食準備時間にG男のクラスを訪問した。担任が『Coは、3年1組の給食の様子を写真に撮りに来た大学の先生です』と子どもたちに紹介した。Coは、クラスの給食の様子を写真撮影しながらG男を観察した。その際、G男を観察していると本人及びクラスの子どもたちに気づかれなかったようにした。

その日は、たまたまG男の隣の子どもが休んでいた。<僕たちのグループで給食を一緒に食べませんか>とG男が声をかけてきた。G男の手を握り『嬉しいな。ありがとう。G男のグループで給食が食べられるなんて最高に幸せだ。ありがとう』と感謝の気持ちを伝えた。担任がG男にさりげなくCoを給食に誘うように声かけを指示したのである。G男は誰に言われることなくCoの給食の準備をしてくれた。

G男は、給食準備時間から給食の時間にかけて、かなり分厚い本を読んでいた。「何という本を読んでいるの」と尋ねると、<建築物語を

読んでいる」と答えた。「すごい読んでいるね。この本は中学生がよく読む本だよ」と言うと、側にいた他の子どもたちが『先生、G男は本をよく読むんだよ』『読むのが速いんだよ』『算数の計算も速いんだよ』と賞賛する言葉があちらこちらから聞こえてきた。「G男の側に座っていると、G男は何かすごい才能を持っているんじゃないかということ強く感じる。給食が終わってから、ちょっとお願いしたいことがあるんだけど」と言うと、G男は笑顔で嬉しそうに「いいよ」と応えた。その時、側にいた男子5人が、自分たちも一緒に行きたいと言ってきた。このような状況になることは、ある程度予測できていたので、担任とはその場合の対応について事前に打ち合わせができていた。G男と5人の男子に、「担任に事情を説明して許可をもらってくるように」と指示した。担任から清掃免除をもらったG男たちは『清掃しないでラッキー』と喜んでいて、G男は感情を他の子どもたちのように言葉には出さなかったが、この中の主役は自分であるかのように男子のグループの真ん中に笑顔で立っていた。

## (2) 描画の場面

G男を除いた5人の児童に駐車場のC oの車を描くようにお願いした。車の正面、側面(2人)、背面、運転席を誰が描くかは子どもたちに決めさせた。5人の描いた絵を寄せ集めると車の全体像が分かるようにした。G男には、「C oの給食の準備と後かたづけをしてくれたので、C oの似顔絵を描いてもらおうと思っているけどいいかな」と説明し子どもたちの同意を得た。そして、G男にB4サイズの画用紙を渡すと、拒むこともなく笑顔で受け取った。この瞬間、G男は絵を描くことができるかもしれないという確信を得た。

他の子どもたちは、それぞれの場所に移動して決められた車の部分をすぐに描き始めた。G男は、自分の背後から誰かが見ているのではないかと気になるようで、何度も後ろを振り向く行動が見られた。G男はC oを見て描こうとするが、少し描くとすぐに消すということを何度

も繰り返した。

「うまく描こうとしなくてもいいんだよ。G男は、他の人に比べて感じる力が強いんだから、見て感じたままを描けばいいんだよ」「C oの顔を1分間ぐらい見て、感じたそのままを描いて欲しい」と言った。それでも少し緊張したような笑みを浮かべながら「うーん」とうなり声を出しながらもじもじしていた。

「G男、目を閉じてごらん。C oの姿が浮かびますか」<浮かぶ>「浮かんでいるね」「鉛筆を持った手を画用紙の上に乗せてください」「そして、ゆっくりと目を開けて、C oを見ないで画用紙だけを見てください」「G男は目を閉じて浮かべたC oの顔を画用紙の上でも浮かべることができる能力を持っている。どうですか」<何となく見える>「見えるでしょう。画用紙の上にC oの顔が見えるから、G男はC oの似顔絵を描けるんだよ」「C oを見ないで画用紙だけを見てください。鉛筆が自然に動いて絵が描けます。G男は、そのような能力を持っている。すごいんだよ」「C oが、はい、と言ったら描き始めて下さい」

C oが「はい」と言った瞬間から、G男は全く消しゴムを使うことなくC oを描き始めた。「G男、それでいいんだよ」「G男の感じる力はやっぱりすごい」「G男のすごさが、C oによく伝わってくる」「G男、そう、そう、それでいいんだよ」と言葉かけの始めには、「G男」の名前を必ず言ってから、後押しするような言葉かけを何度もおこなった。

## (3) G男が絵を描いた瞬間

G男は、周りを気にして後ろを振り向くこともなく、そして顔をあげてC oの方を見ることもなく20分間で絵を描くことができた。描き終えた瞬間に「G男、描けたじゃないか。やっぱりG男はすごい。C oの気持ちが絵の中に描かれている。普通の人には上手に描いても、絵の中にその人の気持ちまで表現できない。G男はやっぱりすごい」と賞賛の言葉何度も言った。

今の気持ちを尋ねると、G男は、<自分にそんな能力があると思わなかった>、<本当かな

と思った>、<自分から絵をかいたのはじめて>と答えた。今、G男が述べた感想をそのまま絵のそばに書くように指示した。書き終えたのを見届けてから「G男、これまでかけなかった絵と作文が20分間でちゃんとかけたじゃないか。本当にすごいよ」とCoは賞賛の言葉を何度も言った。側でG男が絵を描くのを見ていた他の児童が『先生とクラスの友達にも知らせてくる』と叫びながらその場を立ち去った。この時、G男は笑みを浮かべていた。

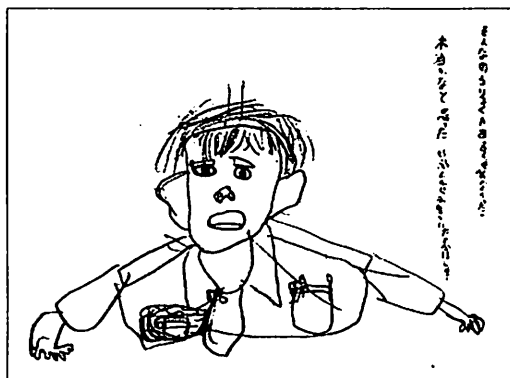


Fig2 G男が描いたCo

#### (4) 担任の対応

G男が教室に入るなり拍手と歓声が上がった。担任はG男を抱きしめなが『よく頑張ったね。よかったね。すごい』と涙を流しながら誉めた。担任は、絵をG男に持たせてみんなの前で誉めた。後ろの席の子どもが、「よく見えないから、G男が絵を持ってみんなの席のところを廻れば」と言ったので、G男は、素直にその子の言う通りにした。

担任は、G男が廻っている最中に何度も「G男の絵には何か気持ちが入っている。すごい。こんな才能がG男にあると思わなかった」とG男に自信を持たせることを意識して褒めたようである。

次にCoがG男の絵のどこがすごいかを子どもたちにわかりやすく説明した。その直後、担任が4人の子どもを指名して、G男の絵についての感想を求めると、「目が生きている感じがする」「カメラが本物みたい」「短い時間でこれだけ描けたのですごい」「絵を大きく描いてい

るのですごい」とG男を褒める言葉だけであった。それは、担任とCoがG男の絵を何度も褒めたことが、子どもたちに影響したと考えられる。

担任は、「G男が描いた絵を校長先生にも見せないといけない」と学級の子どもたちに言って、5校時の授業を自習にしてG男を校長室に連れて行った。担任が「幼稚園から小学校3年の今日まで一度も絵と作文をかいたことがないG男がかいた初めての絵と作文です」と言って校長に説明した。校長も「こんな上手に絵を描ける子が、今日初めて絵を描いたなんて信じられない。これはすごい。麦茶で乾杯しよう」とG男を褒め称えた。

担任は校長室から母親の職場に電話を入れ「お母さん、今日、G男がすごい絵を描いたので家で褒めてください」と伝えた。担任が電話口からG男の絵を褒める度に、G男は嬉しそうに笑みを浮かべ、麦茶の入ったコップを何度も口にしていた。

#### (5) 絵日記をかく提案

担任を前にして「G男は自分が感じたことを絵に素直に表現できるすごい才能を持っていると思うから、絵日記を描いてみないか」という提案をした。G男は嬉しそうにうなずいて<やる>と返事した。Coが明日、スケッチブックを準備して学校に届ける約束をした。絵日記をかくにあたってG男とCo、担任の3人で3つの約束をした。

- ① 20日間、毎日、絵日記をかく。絵日記は絵と文章でかくこと。
- ② 絵日記は、朝の会の前に担任に提出しみてもらう。
- ③ 10日間隔ぐらいでCoが絵日記を担任から受け取り、感想を書いてG男に返却する。

【G男の絵日記】

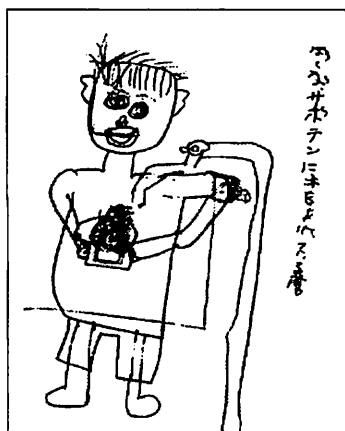


Fig 3 10月20日  
ぼくがサボテンに水をあげている所



Fig 4 10月21日  
ぼくが、ちきゅうぎを見ている所

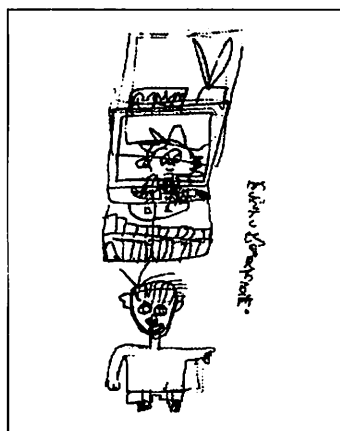


Fig 5 10月22日  
ぼくがテレビを見ている所

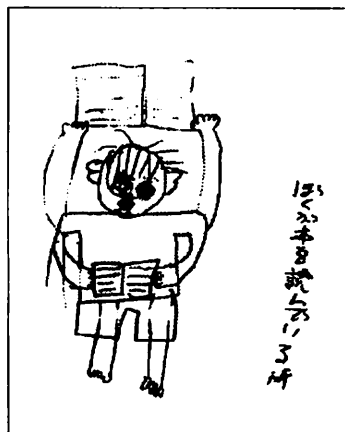


Fig 6 10月23日  
ぼくが本を読んでいる所

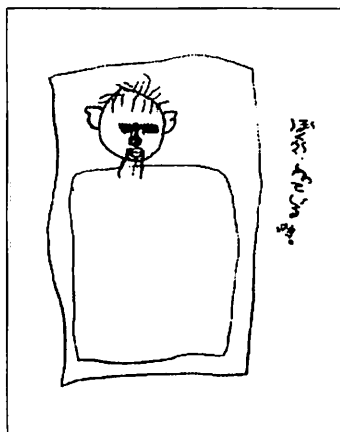


Fig 7 10月24日  
ぼくが、ねている時

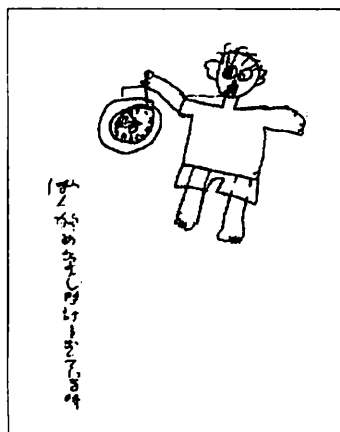


Fig 8 10月25日  
ぼくがめざまし時計をおしている時

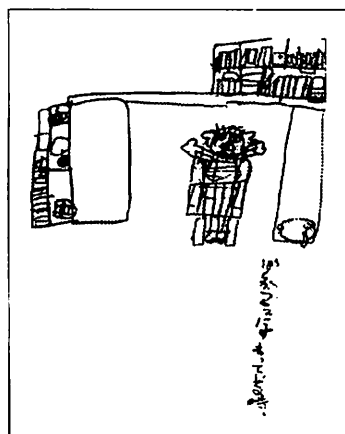


Fig 9 10月26日  
ぼくがつくえにすわっている時

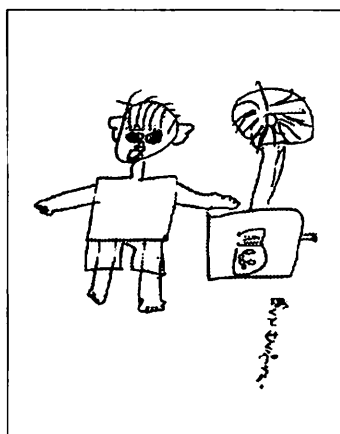


Fig 10 10月27日  
ぼくとせんぼうき

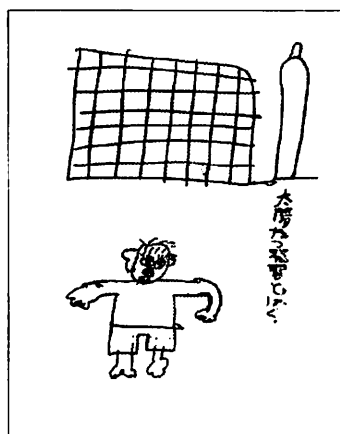


Fig 11 10月28日  
太陽ねつ発電とぼく

G男へ

G男、すばらしい絵がかけてましたね。G男が、考えていることや、かんじていることが、そのまま絵にあらわれていて、とてもすばらしいと思います。またかいてください。G男には、見たことや感じたことを絵でひょうげんできるすばらしいさいのうがあります。

ひらたみきお 10月27日

Fig12 Coの絵日記のコメント(1)



Fig13 10月29日  
ぼくがあさごはんをたべようとして  
いる時のようす

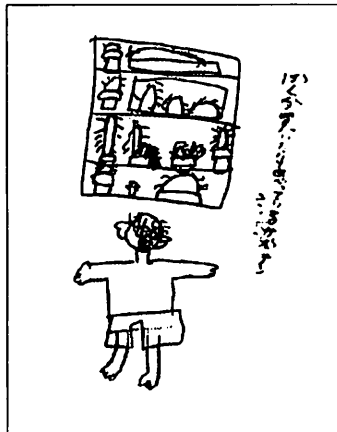


Fig14 10月30日  
ぼくが買いたいと思っているサ  
ポテン



Fig15 11月31日  
ぼくがすずめにパンくずをあげ  
ている時



Fig16 11月1日  
電話をしている所

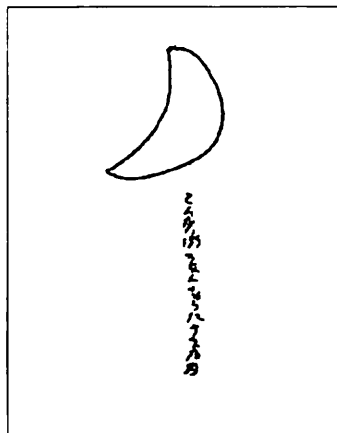


Fig17 11月2日  
天体望遠鏡にうつつた月

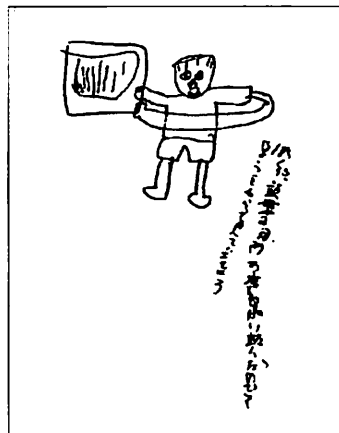


Fig18 11月3日  
ぼくが、読書月間で本をいっば  
い読んだので、しょうじょうを  
もらって見ているところ





Fig19 11月4日  
楽しいことではないけれど、犬にかまれたぼく

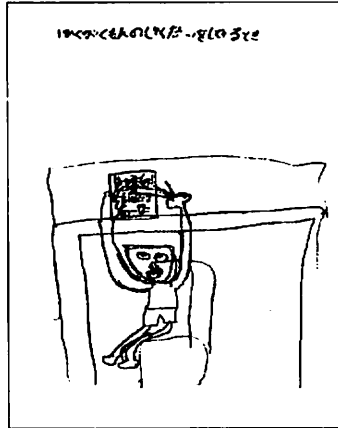


Fig20 11月5日  
ぼくが、くもんのしゅくだいをしてるとき

G男へ

G男には、見たことや感じたことを絵でひょうげんできるすばらしいさいのうがあります。G男の絵日記を見ていると、G男の気持ちが絵に表れていてとても楽しくなります。G男は絵と作文がかけるようになりました。CoがG男の絵日記を見るのは今日で終わりですが、これからもG男が感じたことを絵と作文でかいてください。G男と友だちになれてよかったです。ありがとう。

ひらたみきお 11月7日

Fig21 Coの絵日記へのコメント(2)

### 【母親との面接】

母親との面談は、母親の仕事の都合でG男とのカウンセリングの2週間後に行った。面談には担任も同席した。ここでは、G男が絵と作文をかけなかった原因と考えられる面談内容に絞って以下に記述する。

「お母さん、G男が描いた絵を見てどう思いますか」と尋ねると、「何か不安そうで、自信なさそうに見える」と答えた。Coも担任も同様に感じたことを母親に伝えた。「G男から見るCoは、不安そうに見えるんですね」と尋ねると、母親は「この絵はG男がCoを描いたんですか。何となくG男に似ているような気がします」と答えた。母親もCoや担任と同様のことを感じていた。「家庭の方でG男がこのような表情をする場面がありますか」と尋ねると、「実は、誰にも話したことがないんですが」と言って、家庭の事情を話し始めた。

父親は、G男を風呂に入れたり、休日にはよく公園等で遊ばせるなど子煩悩であった。しかし、G男が3歳の頃に脳腫瘍の手術を行った。父親は、手術以前の過去の記憶は思い出すことができるが、手術後の記憶は、1分前の出来事であっても思い出すことができない。無理に思い出そうとするとパニックを起こしてしまう。

G男が4歳のとき、父親がパニックを起こし、G男の首を絞める場面が一度あった。その時、G男が「お父さん、お父さん、殺さないで、殺さないで」という叫び声で、父親が我に振り返り手を離すことが一度だけあった。それ以後、子どもたちに手を出すことはない。しかし、G男が「お父さん、早く元気になってよ」と励ましたり、部屋の中で騒いだりすると、父親はパニックを起こす。その姿を家族に見られたくないので、自分の部屋に閉じこもり、壁に頭をぶついたり、拳で壁を叩いたり、拳で自分の頭を叩い

たりするなどの自傷行為をするようになった。そのようなときには、G男に声を出させないようにするために静かに本を読ませていた。

G男が3歳の時から9歳の現在まで、父親が家にいるときには、大きな声を出したり騒いだりすることを我慢してもらうしかなかった。「お父さんは、病気してこんなふうになっちゃったから我慢しようね」と母親は、いつもG男に言い聞かせていた。一番居心地のいいはずの家の中で、常に緊張状態にいるG男のことも心配であったが、それでもG男は普通に学校に行っているのだから、どうしても、「お父さんに比べたらまだいいや」と思ってしまうところがあった。

G男が描いたCoの自画像は、家でのG男の姿に似ている感じがすると母親は述べた。担任からG男は家で絵を描きますかと尋ねられて、幼稚園から3年生まで家で本を読んでいる場面はよく見かけたが、絵を描いているのを見たことがあまりないことに母親は気づいた。

母親は、G男が描いたCoの絵 (Fig 2) と絵日記に描かれたG男の自画像の表情の変化に驚いていた。家でも、スケッチブックを準備してG男と一緒に絵を描く時間を作りたいと述べた。

### 【考 察】

考察においては、G男が絵と作文がかけられるようになった過程及び描画の解釈に焦点を当て考察していきたい。

#### (1) カウンセリングの方針

学校カウンセリングでは、短時間で解決を図ることを目指さなければならない。そのためには、G男のことを一番理解している担任及びクラスの仲間とCoの連携が重要である。Co一人ですべてを解決しようとするとうカウンセリングが長期化する場合がある。

本事例におけるカウンセリングでは、クライアントであるG男には知らせず、Coが担任や保護者と連携し、クラスの仲間を巻き込みながらG男と自然な形で関わる場面設定を行った。

その中で遊戯療法的に関わり、描画場面までスムーズにもちこむことができた。絵を描かせることを第一目的とし、作文については第2目的とした。それは、描画の方が作文を書くことより抵抗が少ないと考えたからである。

今回、シングル・セッション・カウンセリングを担当に提案した大きな理由の一つは、Coが以前に同様な事例を扱った経験があったことである。シングル・セッション・カウンセリングにおいては、担任との介入シナリオの具体的な検討が重要になる。本事例においては、次のような介入シナリオを作成した。

①G男がカウンセリングされているということを、本人及び学級の他の子どもたちに知られないようにする。②給食の様子を写真撮影に来た大学の先生という場面を設定を行う。③G男に笑顔で語りかけ、笑いを共有する。④関わりをとおして感じたG男の他の子どもより優れているところをみんなの前で誉める。⑤学級の仲間をカウンセリングの援助者に位置づける。⑥描画場面においては、描画に対する自己効力感を高めるために「G男には、他の人よりも感じる力があり、それを表現できるすごい能力を持っている」と何度も伝えること。

#### (2) G男を誉め認める意義

G男のことを誉めるときには必ず「G男は…」と名前を最初に呼ぶようにした。そうすることによってG男に「自分」というものを意識づけ、描画に対する動機づけを高めることであった。担任とも共通確認をし担任も同歩調でG男に関わった。

G男に対しては、読書のことや算数の計算力などについて誉めると同時に、「G男は感じていないかもしれないけど、G男は感じる力が他の人よりも強い気がする。また、それを表現することができるすごい才能を持っている」ということを何度も伝えた。そのことによって、描画場面においてG男は、「もしかしたら、本当に自分はすごい能力を持っているかもしれない。だから、本当に絵を描くことができるかもしれない」という描画に対する自己効力感を高まり、

その結果、描画への動機づけが高められ、初めて絵を描くことができたと考えられる。それは、G男が描画の直後に発した最初の言葉が「そんな能力があるとは思わなかった」、次に「本当かなと思った」、そして「自分から絵をかいたのははじめて」であったことから明らかである。このことは、G男へのカウンセリング仮説が支持されたと考えられる。

### (3) 描画の解釈

G男は描画のときに、自分の背後から誰かが見ているのではないかと何度も後ろを振り向いたり、描いては直ぐに消しゴムで消すといった行動をしていた。その時のG男の顔の表情は、緊張しているというよりも、非常に不安げで、何かに脅えているかのように感じられた。

G男がCoを描いた描画（Fig 2）は、初めて絵を描いたとは思えないぐらいA4の紙面いっぱい描かれていた。しかし、目の表情は、何か不安げで悲しそうにも何かに脅えているかのようにも感じられる。描線は全体的に筆圧が弱く、口は大きく開いて描かれ、大きな声で何かを言いたいように感じられる。両耳の大きさは、顔の大きさに比べてかなり大きく描かれている。耳を大きく描いているのは、聞き耳を立て周りを意識しているようにも感じられる。肩から腕を真っ直ぐ描いているところは、人物画が硬直しているように感じられる。また、描画の中の描線が切れていたり、はみ出していたのは、早く描き終えないとというG男の焦りと緊張感が表れていると考えられる。

それでは、G男が描いたFig 2の人物は、本当にCoなのだろうか、それともG男なのだろうか。CoはG男の情動が描画に投影されたと考えた。それを検証するために、母親面談の時に、始めに「お母さん、G男が描いた絵を見てどう思いますか」と尋ねた。母親は「何か不安そうで、自信なさそうに見えます」「この絵はG男がCoを描いたんですか。何となくG男に似ているような気がします」答えた。母親もCoや担任と同様のことを感じて取っていた。G男が描いたFig2の人物は、Coが予想したよう

にG男自身であると考えた方がいいのではないだろうか。

翌日描いた絵日記「ぼくがサボテンに水をあげている所」（Fig 3）は、描線も描き直しの後が殆ど見られないことから、スムーズに描くことができたと考えられる。Fig 2の描画と比較して、顔全体から不安や緊張感、自信のなさのようなものも感じられない。逆に目が生き生きと描かれ、口も大きく描かれ、楽しそうに誰かに話しかけている穏やかな表情にも感じられる。耳もFig 2とは異なり、顔の大きさと比べてバランスよく描かれている。描線も筆圧が強く描かれている。

Fig 3からFig16までの描画には、耳が描かれているが、Fig18からFig20の描画にはG男の自画像に耳が描かれていない。その境界になっているFig16の「電話をしている所」の描画の耳の描き方は、顔の輪郭と一筆書きで描かれている。それに対して、Fig15までの耳の描き方は、顔の輪郭を描いてから耳を描いている。

また、Fig 3からFig20（Fig17を除く）の描画に書かれているタイトル文に必ず使われていた「ぼく」という表現が、Fig16「電話をしている所」には使われていない。Fig16に描かれた人物画はG男でない可能性がある。G男が家に友達を連れてきたことは一度もないという母親の話し、妹と母親は髪の毛が長く伸びているという事実からしても、父親の可能性が考えられる。

Fig17「天体望遠鏡にうつった月」の描画だけが人物が描かれていない。なぜだろうか。浅利（1999）によると、子どもの描画における月は父親の象徴であり、存在感の薄い、暖かみの少ない、あまり頼りにならないタイプの父親であり、三日月は満月に比べて一層存在感の弱い父親であると述べている。Fig17の描画を解釈すると、三日月はG男の父親のシンボルで、望遠鏡はG男自身であると考えられる。望遠鏡から見える三日月は、G男の目（望遠鏡）に映る父親（三日月）は、病気で働くこともできず、すぐに約束も忘れてしまう頼りない存在になっていると思われる。

以上のことから、Fig16の人物画は、父親である可能性が推測できた。そこで、11月7日に学校でG男に絵日記を手渡す際に、「絵日記の中で電話をしているこの人は誰ですか」と尋ねると、「お父さん」という答えが返ってきた。このことは、これまでに述べてきたFig16とFig17の解釈が成り立つことが言えるのではないだろうか。

G男が父親を描いた後 (Fig16) から描画に変化が出てきた。G男の自画像にこれまで描かれていた耳が描かれ無くなった。また、頭部の描き方にも変化が現れてきた。頭部は、卵形に滑らかに描かれ、髪の毛も多く描かれていたが、逆三角形のような頭部になり髪の毛も少なく描かれている。G男に何らかの変化が起こったと考えられる。しかし、父親を描いた (Fig16) 後に変化したという事実だけで、それ以上のことについて現段階では推し量ることはできない。

絵日記に書かれている文章でも、Fig3からFig11までは、「ぼくがサボテンに水をあげている所」「ぼくが地球儀を見ている所」「ぼくがテレビを見ている所」等のように、事実のみをタイトル的な短い文章で表現し、そこには情動がなかった。しかし、Coが書いたコメント (Fig12) の次の絵日記 (Fig13) からは、Fig9とFig10を除いて、以前に比べて、「ぼくが買いたいと思っているサボテン」、「ぼくがあさごはんを食べようとしている時のようす」、「ぼくが、読書月間で本をいっぱい読んだので、しょうじょうをもらって見ているところ」、「楽しいことではないけれど、犬にかまれたぼく」等のように絵日記の中で情動表出ができるようになってきたと考えられる。

全体をとおして、絵日記の中で「ぼくが…」と常に記述しているところは、G男が自己主張しているかのように感じられる。村山 (1999) が述べているように、描画によって自己表現するというプロセスそのものが、視覚的思考によるG男の自己理解の作業である。また、描画活動は、G男のある心的状態の表出であり、この表出の機能によって、描くという行為は、自我の象徴的世界に向けて押し広げる行為と見な

せるだろう。

### 【フォローアップ】

G男の絵日記終了後、1ヶ月後に学校を訪問し担任とG男に会った。その時のG男の第一声が「絵も作文もちゃんとかけるからね」であった。担任からも、図工の授業でも絵を描くことに抵抗を示すことがなく、国語の授業等の作文課題についても、他の児童よりはまだ短文ではあるが書けるようになったという報告があった。母親から担任に、家の方でも以前は静かにするために読書ばかりしていたが、カウンセリング後は、妹と絵を描く場面が増えてきたと報告があったようである。

### 【おわりに】

4年間も絵と作文がかけなかった子どもが、シングル・セッションでかけるようになった今回の事例は、教育現場に様々な示唆を与えると考える。子どもは絵や作文がかけないのではない。その子にあったかかせるためのスキルを教師が持っていないということではないだろうか。教師のスキルのベースには、どんな子どもも①できるようにになりたい、②褒められたい、③才能を認められたい、④誰かと笑いを共有したい、という子どもの思いを受け止めることがなければならない。

学校カウンセリングにおいては、カウンセラーに任せるのではなく、カウンセラーと担任、そしてクラスの子どもたちとの連携を行い、介入シナリオを作成し見通しを持って取り組むことが大切である。

描画は、言語によるコミュニケーションでは、十分伝えることができない子どもの情動を補完するコミュニケーション機能を持っていると言える。だからこそ、子どもと関わっていく上で、今後、教師及びカウンセラーの描画カウンセリング能力を高めるための取り組みが求められている。描画心理学をカウンセリングの中に活かし、子どもの笑顔を引き出したいものである。

注) 本文の中で、「絵と作文をかく」、「絵を描く」、「作文を書く」は区別している。

### 【謝 辞】

本論文をまとめるにあたり、G男と同じような子どもの立ち直りの参考になるようなことがあればと快く了解して下さった保護者及び担任に深く感謝申し上げます。

### 【引用・参考文献】

- ・ Machover K. 1953. Human figure drawings of children. *Journal of Projective Techniques*, 17, 85-91
- ・ 岩井寛 1999 絵画療法の理論と実施 アートセラピー 編者：徳田良仁・村井靖児 日本文化科学社
- ・ Litt, M. D. 1988. Self-efficacy and perceived control : Cognitive mediators of pain tolerance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 149-160.
- ・ Schunk, M. D. 1989. Self-efficacy and achievement behaviors. *Educational Psychology review*, 1, 173-208
- ・ 浅利篤 1999 原色子どもの絵診断辞典 描画心理学双書第7巻 黎明書房
- ・ 村山久美子 1999 心を描く心理学 プレオン出版